

2013（平成25）年度

須坂市内発掘調査報告書

—その1—

塩川・須坂・小山遺跡群内 柳原遺跡
大和合古墳

2 0 2 4

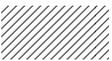
例 言

1. 本書は、須坂市において2013（平成25）年度に記録保存を目的に実施された埋蔵文化財発掘調査6件のうち下記2件の発掘調査報告書である。
 - ・須坂市大字塩川字柳原地区における市道臥竜線の延長工事に伴う発掘調査
住 所：長野県須坂市大字塩川字柳原733番地2ほか
調査面積：500.3㎡
期 間：2013（平成25）年11月22日～同年12月20日（29日間）
注記記号：アルファベットの「YH」
 - ・須坂市大字坂田における大和合古墳石室崩壊防止工事に伴う記録保存調査
住 所：長野県須坂市大字坂田字大和合697番地
調査面積：断面の記録のみ
期 間：2014（平成26）年2月14日～同年2月21日（8日間）
注記記号：遺物なし
2. 現地における発掘調査は田中一穂・宮田慈が担当した。本書の編集は、松井千穂が担当した。
3. 本調査における出土遺物ならびに図面・写真は、須坂市埋蔵文化財夏端整理室で保管している。

凡 例

本書では、調査によって確認された遺構と遺物の基本的資料を提示することに主眼を置いた。資料掲載の要領は下記の通りである。

1. 実測図等に掲載した方位は磁北を示している。
2. 土層図のレベルは近隣の基本基準点又は公共基準点を使用して設定している。
3. 縮尺については、各図中に示してある。
遺構の略記号は以下の通りである。
SQ：遺物集中域 SC：炭化物集中域 SS：集石
4. 基本土層や遺構埋土等の色彩は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局 監修）による。
5. 遺構図や実測内の表現方法は下記の通りである。

〈遺構〉	地山		炭化物	
〈遺物〉	須恵器		灰釉陶器	

目次

例言

凡例

目次

第I章 遺跡の位置

図1 須坂市遺跡分布図	2
-------------	---

第II章 調査成果

第1節 塩川・須坂・小山遺跡内 柳原遺跡

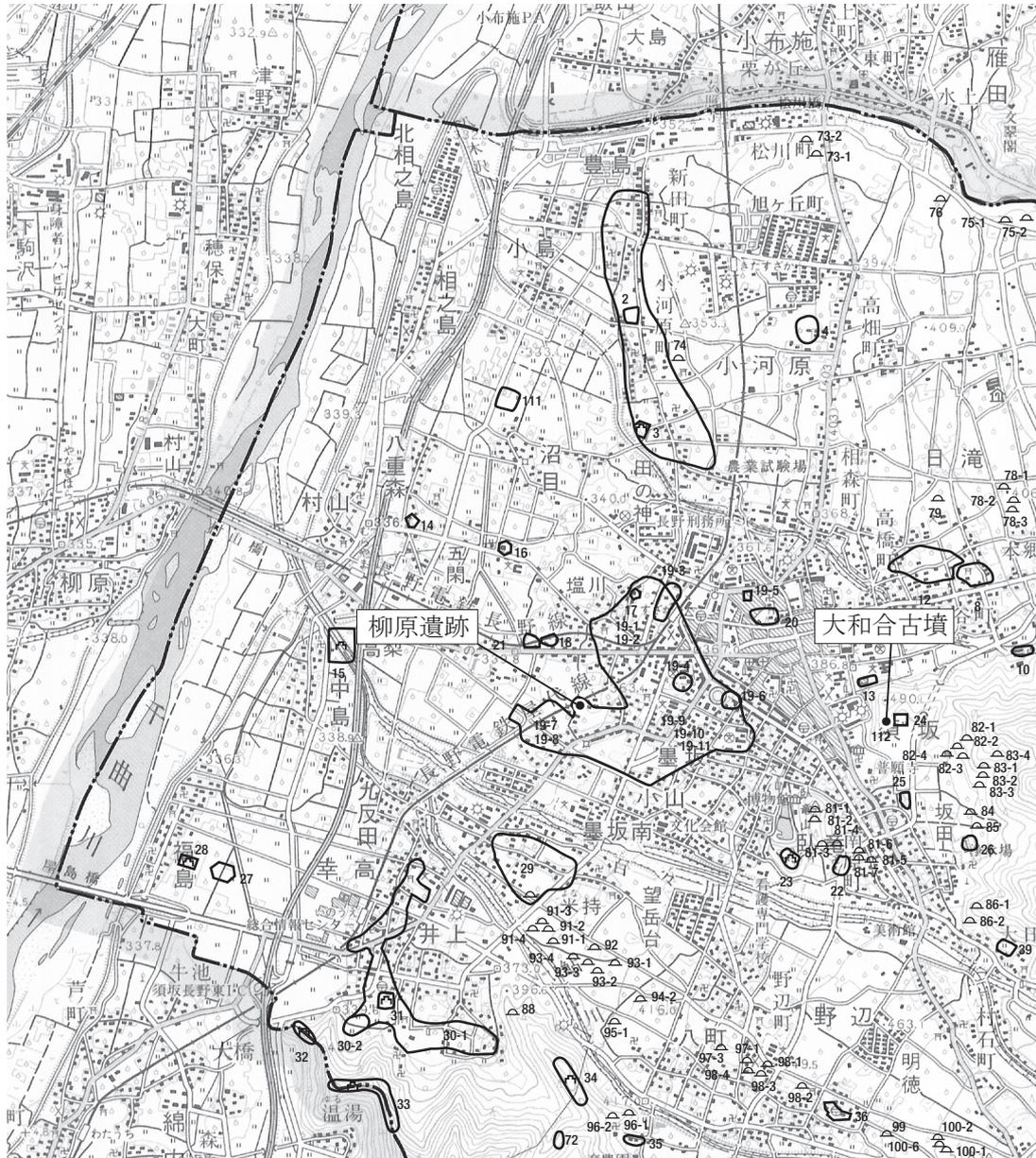
1. 調査に至る経緯	3
図2 調査地位置図	
2. 調査体制	4
3. 遺跡周辺の地理的環境	5
4. 遺跡周辺の考古学的環境	
図3 調査地と周辺遺跡	
5. 調査成果	
(1) 調査の概要	6
図4 壁断面図	
図5 全体図・遺構微細図・断面図	7
写真1 柳原遺跡調査区	8
(2) 遺構と遺物	9
表1 遺物重量表	
表2 遺構一覧表	10
実測図	11
写真2 出土遺物	12
表3 遺物観察表	13
6. まとめ・参考文献	14

第2節 大和合古墳

1. 調査に至る経緯	15
図6 調査地位置図	
図7 断面図	16
写真3 大和合古墳断面	

抄録

第I章 遺跡の位置



(※縮尺は任意)

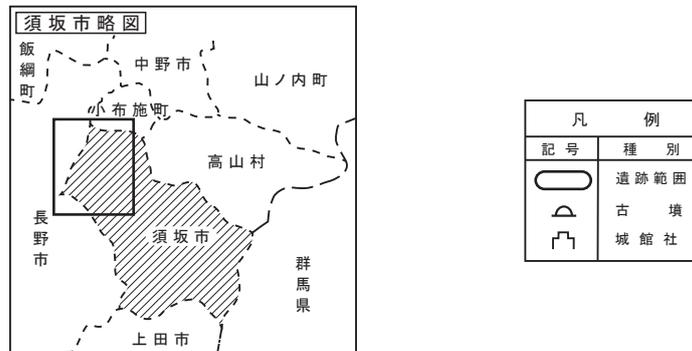


図1 須坂市遺跡分布図 (豊丘・仁礼・菅平を除く)

第Ⅱ章 調査成果

第1節 塩川・須坂・小山遺跡群内 柳原遺跡

1. 調査に至る経緯

柳原遺跡は塩川・須坂・小山遺跡群の南西部外郭に位置する。今回、須坂市墨坂1-13において、都市計画道路臥竜線道路改良工事が行われることとなり、2013（平成25）年11月8日付で事業主である須坂市まちづくり推進部道路河川課より「土木工事のための埋蔵文化財発掘の届出」の提出があった。当該地は、須坂・塩川・小山遺跡群の範囲に該当していたため、発掘調査が必要との意見を付して同年11月15日付で「土木工事のための埋蔵文化財発掘の意見書」を長野県教育委員会あてに提出した。

その後、事業者と協議を行い、試掘調査を実施したところ、遺物の出土を確認した。これを受け、須坂市まちづくり推進部道路河川課と須坂市生涯学習スポーツ課の各担当で二者協議を行った。協議の結果、試掘調査で遺物を確認した道路本線部分を本調査対象地とし、2013（平成25）年11月22日より本調査を実施することとなった。

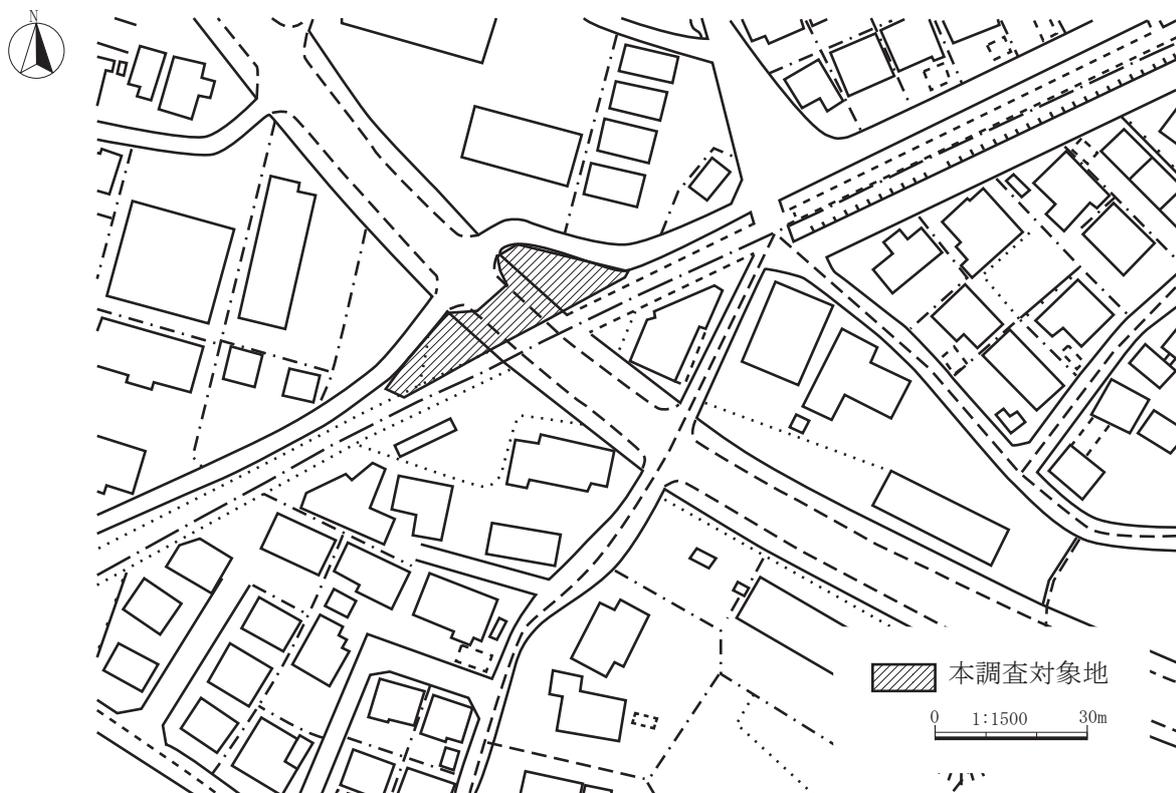


図2 柳原遺跡 調査地位置図

2. 調査体制（第2節と共通）

本調査は、須坂市教育委員会が主体となり、以下の組織体制で発掘調査を実施した。

2013（平成25）年度 調査体制

調査主体者	須坂市教育委員会	教育長	渡邊宣裕
統括責任者	須坂市教育委員会	教育次長	古平幸正
統括管理者	須坂市市民共創部生涯学習スポーツ課	部長	勝山 昇
調査責任者		課長	丸山裕範
調査機関	須坂市市民共創部生涯学習スポーツ課文化財係		
庶務担当	課長補佐	田中賢一	
	係 長	千葉剛成	
	主 事	杉山健一	
	学芸員	上條伸一 下村紗智子	
	事務員	袖山めぐみ	
調査担当	学芸員	田中一穂 宮田 慈	
発掘作業員	新井香織 石原崇 上田美帆 北沢美穂 甲田邦子		
	坂田順子 坂田智恵 篠田千代子 清水春雄 白井弓子		
	関郁子 高橋千穂 永井明美 原真一 樋口典子		
	宮崎良美 山田哲夫（文化財係臨時職員）		
	川村直樹 川村静枝 久米一郎 関谷日出男 高橋輝夫		
	玉井秀子 傳田久 徳永睦雄（公益法人須高シルバー人材センター）		
重機等現物提供	相原建設株式会社		

2023（令和5）年度 整理体制

整理主体者	須坂市教育委員会	教育長	小林雅彦
統括責任者	須坂市教育委員会	教育次長	山岸和美
統括管理者	須坂市社会共創部文化スポーツ課	部長	滝澤永造
整理責任者		課長	峯村清一
整理機関	須坂市社会共創部文化スポーツ課文化財係		
庶務担当	課長補佐	荒井裕清	
	係 長	中村紀子	
	主 事	小林真耶	
	事務員	林梓 長野えみ子	
整理担当	学芸員	松井千穂	
整理作業員	新井香織 高見澤二郎 竹前みどり 田中茂穂 宮崎良美		
	山岸弥生（須坂市パートタイム会計年度任用職員）		
	勝山和夫 玉井秀子（公益法人須高シルバー人材センター）		

3. 遺跡周辺の地理的環境

調査地は須坂駅から西南に約900m、百々川・鮎川が形成する扇状地上の標高約351m付近の地点にあり、千曲川に向かって西になだらかに傾斜した位置となる。廃線となった長野電鉄屋代線の線路は、調査地である小字柳原地籍を通っており、人々が電車を利用し行き来した賑やかな時代の名残を感じさせる。現在では閑静な住宅街となっている地域である。

4. 遺跡周辺の考古学的環境

ここでは、調査地のある墨坂地区で遺物が出土した遺跡の概要を記載する。

②八幡地区 塩川・須坂・小山遺跡群

平成23年度の賃貸住宅建物建築工事に伴い、発掘調査を行った。土坑11基ピット8基を検出し、遺物は奈良～平安時代期の須恵器や土師器片が出土した。

③八幡浦A遺跡

平成25年度に賃貸住宅建物建設工事に伴う宅地造成が計画され、発掘調査を行った。上層からは古代から中世の遺物が散発的に出土し、下層からは弥生時代の土器が多く確認された。鎌倉時代の女性の人骨が出土している。

④須坂八幡裏遺跡

平成27年度の介護福祉施設の新築工事に伴う発掘調査を実施し、古代の遺物片が出土している。

⑤八幡裏C遺跡

平成30年度の都市ガス販売者須坂営業所兼ショールーム新築工事に伴い、発掘調査を行った。遺物集中域3箇所、石組みを伴う焼土1箇所、炭化物集中域1箇所が確認され、弥生時代から古墳時代の遺物が出土した。



- ①調査地
- ②塩川・須坂・小山遺跡群
- ③八幡浦A遺跡
- ④須坂八幡裏遺跡
- ⑤八幡裏C遺跡

図3 調査地と周辺遺跡 (縮尺は任意)

5. 調査成果

(1) 調査の概要

今回調査の対象となったのは、市道臥竜線の延長道路予定地の北西の一部で、試掘坑1の周辺である共用道路隣接部分、実質発掘調査面積は500.3㎡である（第2図）。

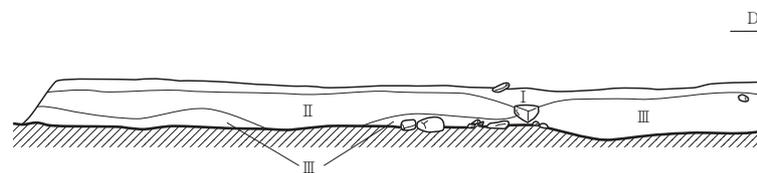
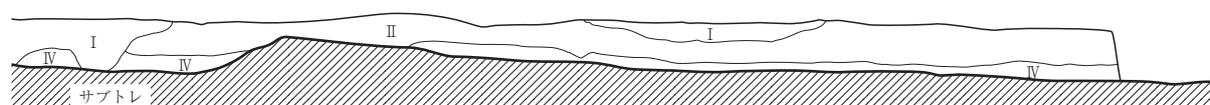
発掘調査に先立ち、北西から東に延びる拡張予定道路部分に対し、20箇所の試掘坑を設定して、試掘調査を行った。試掘坑1では地表下約40cmで暗灰褐色～黒褐色土層が検出された。試掘坑19からも同様の土層が検出され、土師器片2点が確認された。ほか18の試掘坑からは包含層や遺物の発見はなかったが、暗灰褐色～茶褐色の土層を包含層と判断し、埋蔵文化財の包蔵を確認した。

基本層序は調査区南壁で確認し、I層は表土・かく乱で、II層は黄褐色砂質土。III層が包含層で暗灰褐色～黒褐色土である。IV層は黄茶褐色砂質土、V層は暗灰褐色土礫混じりとなる。

調査対象地の表土は広くかく乱を受けており、そのかく乱は調査範囲の各所で地山の深度以下にも影響を及ぼしていたため、包含層の残存状況は良好ではなかったと言える。遺構は遺物集中域が1箇所（SQ1）と炭化物集中域（SC2）が1箇所、かく乱内ではあるが集石域（SS3）が確認できた。

南壁断面図

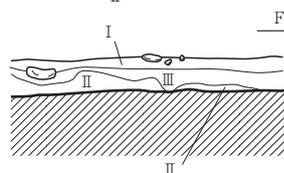
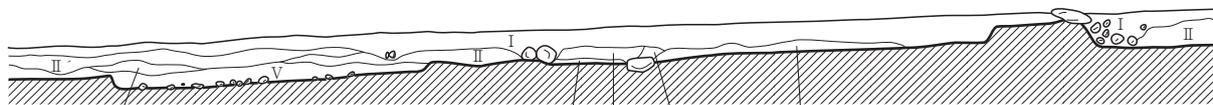
C—351.40



- I 表土・かく乱
- II 黄褐色砂質土(7.5YR 橙 7/6)
- II' 暗黄褐色砂質土(7.5YR にぶい橙 6/4)
- III 暗灰褐色～黒褐色土(包含層)
(7.5YR 褐灰 4/1)
- IV 黄茶褐色砂質土(7.5YR 浅黄橙 8/6)
- V 暗灰褐色土 礫混じり(7.5YR 褐灰 5/1)

北壁断面図

E—351.40



0 1.80 2m

図4 壁断面図

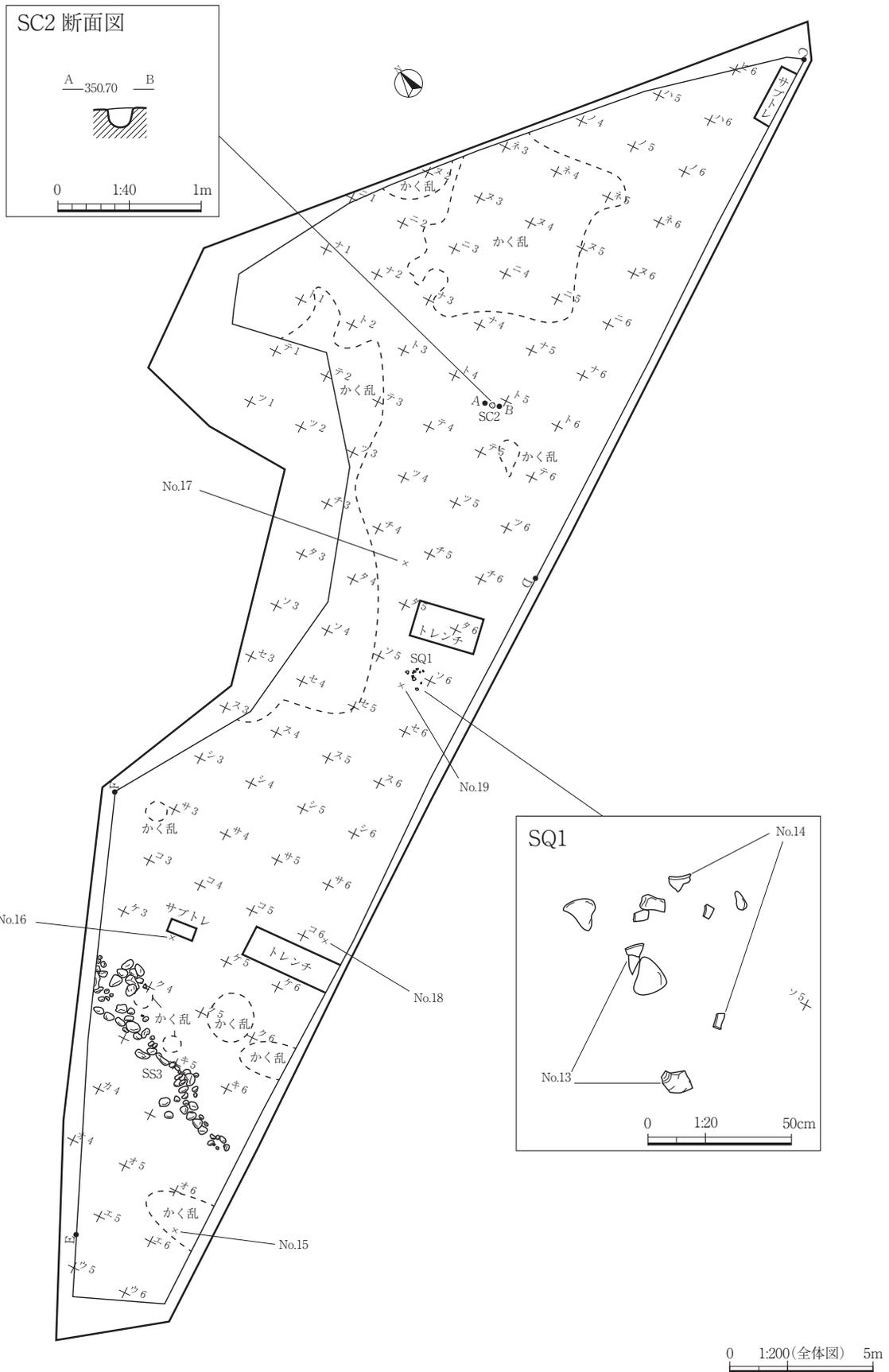


図5 全体図・遺構微細図・断面図



調査区全景（西より）



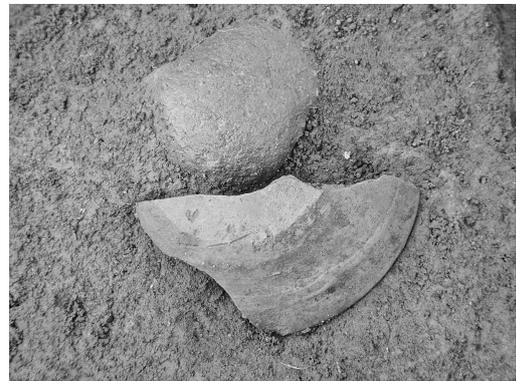
調査区 北壁



調査区 南壁



SQ1



No.17 土師器杯片 出土状況

写真1 柳原遺跡調査区

(2) 遺構と遺物

遺構

SQ1（遺物集中域）

調査区中央部のソ5・セ5グリッドに位置する。規模は長径100cm、短径75cmの楕円形を呈する。出土土器は播鉢6点323g。接合可能な土器片も含めて4種の播鉢が確認された。

SC2

調査区中央よりやや北のテ4グリッドに位置する炭化物集中域である。平面形状は円形で、長径20cm、短径18cm、深さ12cmとなる。遺物は出土していないため、時期は不明である。

SS3

調査区南西部、カ6・カ5・キ4・キ3・ク3グリッドの集石域である。北壁断面図から、かく乱層から検出した集石であることが読み取れ、SQ1やSC2よりも高い標高に位置することも含めて、後世のかく乱時のものである可能性が高い。

遺物

今回の発掘調査の結果、遺構および遺構外から遺物保管箱（縦59.0×横38.6×高さ15.4 単位：cm）2箱分の遺物が出土した。土器の大半は古代から中世のもので、近現代の陶磁器も含み、そのほか、磨石や銭貨も出土した。土師器の割合が最も多く、土器類の総重量は6,146gとなる。完形に復元できるものではなく、摩滅痕が目立つ小片がほとんどである。残存率の高い遺物を中心に、実測できる土器を抽出した。遺物種類ごとの重量の内訳は以下の通りである。

表1 遺物重量表

遺物種別	数(点)	重量(g)
土師器	743	3,125
須恵器	108	1,481
黒色土器	69	454
灰釉陶器	13	61
陶磁器	44	202

遺物種別	数(点)	重量(g)
播鉢・片口鉢	12	721
内耳鍋	1	22
珠洲焼	2	76
赤彩土器	1	4
磨石	2	450
銭貨	2	3

No.1：表土剥ぎ掘削時に出土した、焼成良好な須恵質の片口鉢である。ハケ調整で内外面を整えているが、若干粘土紐積上げ痕を残す。口縁部はほぼ水平で内側に折返しがある。

No.2：ウ5グリッドより出土した須恵器の甕片で、外面にはタタキ目が施され、内面にはあて具痕が残存している。小片であり、体部の一部と考えられる。

No.3：ウ6グリッドより出土した、口縁部から体部にかけての須恵器短頸壺片である。内外ともにロクロ調整が施されている。口径11cm台で外反する口縁を持つ。

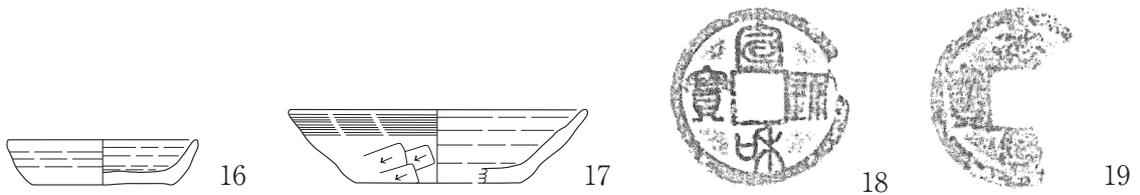
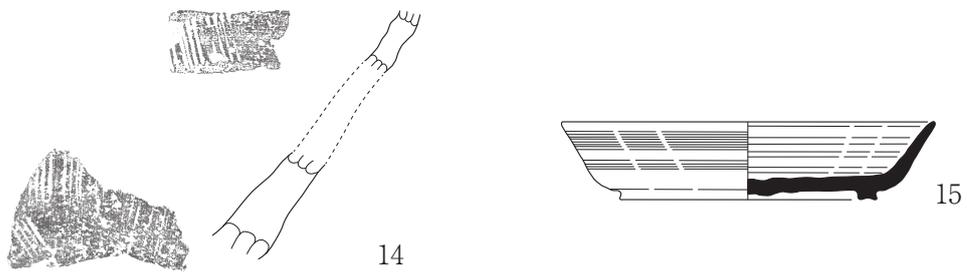
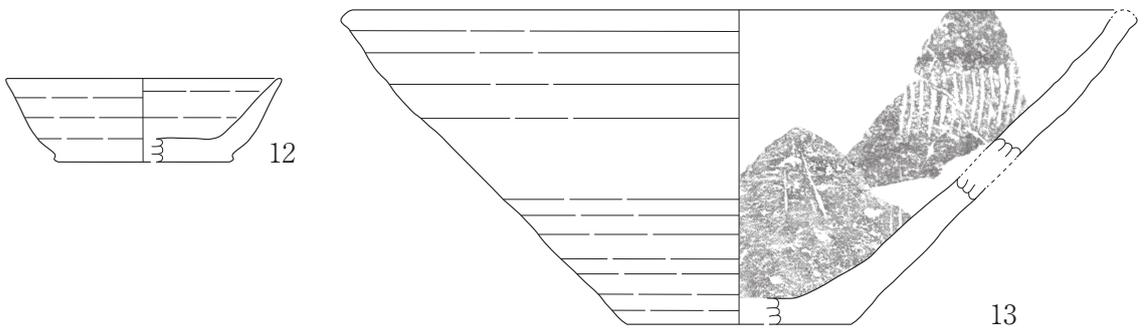
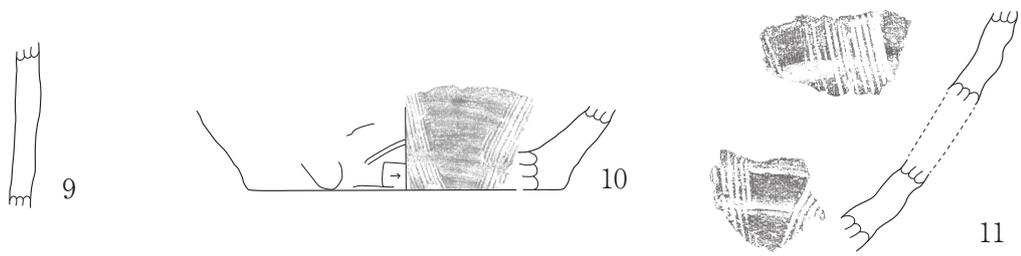
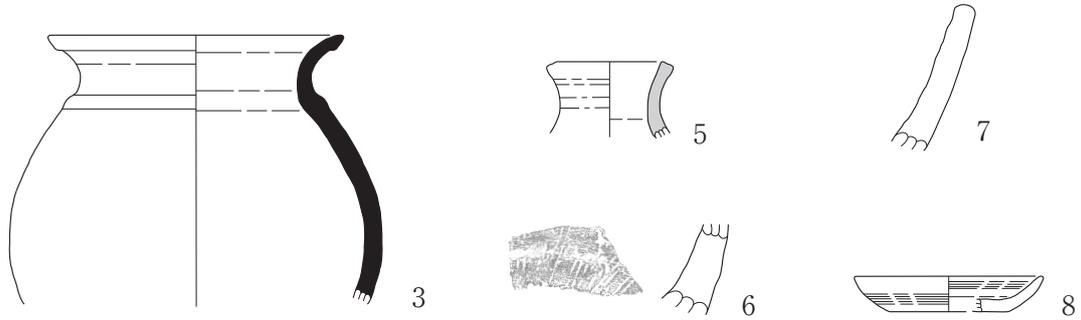
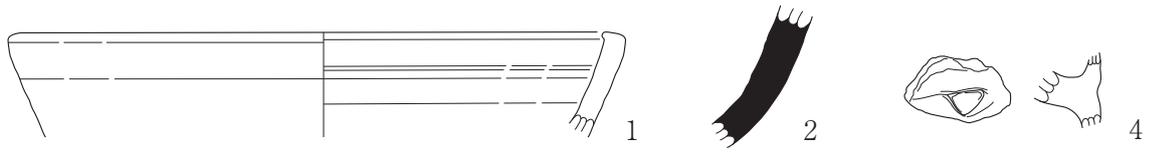
No.4：カ6グリッドより出土した土師質内耳鍋の内耳付属の体部片である。粘土紐巻上げ又は積上げで成形され、平底筒型の胴体であった可能性がある。外面には、長期間にわたって使用されたと考えられる煤が付着している。

No.5：ケ5グリッドより出土した灰釉陶器の小瓶で、口縁部から頸部の小片である。全体的に摩滅や欠損が目立

- つ。口径が約5cmで内側に自然釉薬が観察できる。
- No.6：コ6グリッドより出土した。体部でも底部に近い須恵質の播鉢片で、硬質な器体を持ち、外内面に煤が付着している。外面には粘土紐の積上げ痕が残り、斜位ヘラケズリで調整されている。内面には卸目をもつ。
- No.7：コ6グリッドより出土した須恵質片口鉢の口縁部である。内外ともに粘土紐積上げ痕が残り、横ハケ目調整が施されている。
- No.8：シ5グリッドより出土した土師質の土師皿で、口縁部から底部まで残存している。小型で胎土は密、砂粒はほぼなくやや粉質である。底部から口縁部まで緩やかな輪郭を持ちながら広がる。内外ともにロクロ調整が残り、底部は回転糸切りで仕上げている。
- No.9：シ6グリッドより出土した土師器甕の胴部である。内外ともにロクロ成形後ハケ目調整が施されている。
- No.10：テ5グリッドより出土した須恵質の播鉢の底部から体部下半の部位である。瓦質土器の可能性もある。外面には積上げ痕が残り、ハケ調整で整えている。調整時に抑えたと考えられる指圧痕も残る。底部は静止糸切りである。内面はハケ調整後に卸目を施している。
- No.11：ト4グリッドより出土した須恵系摺鉢の体部片である。2点あり、同一個体と考えられる。外面には積上げ痕が残り、ハケ目で調整されている。内面には卸目がある。
- No.12：ナ4グリッドより出土した土師器の杯片で約1/3残存している。摩滅が目立つ器で、内外面にはロクロ調整、底部には処理の粗い糸切り処理が施されている。明るい茶色粒が胎土に目立つ。
- No.13：SQ1より出土した軟質焼成の須恵質播鉢片である。2点あり同一個体と考えられる。外面は積上げ痕が残り、ナデ調整で整えている。底部は静止糸切りである。押圧痕が残る内面は粗い卸目が施されている。在地産播鉢の可能性が高い。
- No.14：SQ1より出土した須恵系播鉢片である。2点あり、外面は積上げ痕が残り、ナデ調整が施されている。底部から体部への立ち上りの部分には斜位ヘラケズリで整えている。内面にはやや粗い卸目がある。胎土は比較的細やかで密な質感。
- No.15：エ6グリッドより出土した底部から口縁部の須恵器杯片で約1/3残存している。内外面はロクロ調整。底部は大きく跡が残る回転糸切りで、高台が貼付されている。
- No.16：ケ3グリッドより出土した土師質の土師皿で、口縁部から底部まで残存する。口径は7.5cmと小型である。内外面ともにロクロ調整、底部は回転糸切りが施されている。輪郭はやや直線的に立ち上がる。
- No.17：タ4グリッドより出土した土師器の口縁部から底部まで残存する杯で、内外面ともにロクロ調整で整えている。底部は回転糸切り後ヘラナデが施され、底部から体部への立ち上り部位はヘラナデで整えている。
- No.18：コ6グリッドから出土した残存状態の良い篆書体の宣和通宝で、北宋1119年鑄造のものである。
- No.19：SQ1近隣のセ5グリッドから出土した、約1/2が残存している摩耗と腐食が進んだ銭貨で、文字は読み取れない。

表2 遺構一覧表

遺構名	時 期	遺 構			出土土器	
		平面形	規模 (cm)	備 考	総量 (g)	数 (点)
SQ1	中 世	楕円形	長径100 短径75		323	6
SC2	—	円 形	長径20 短径18 深さ12	断面形は長方形	0	0



実測図

0 1.3 10cm
(18.19 は原寸大)

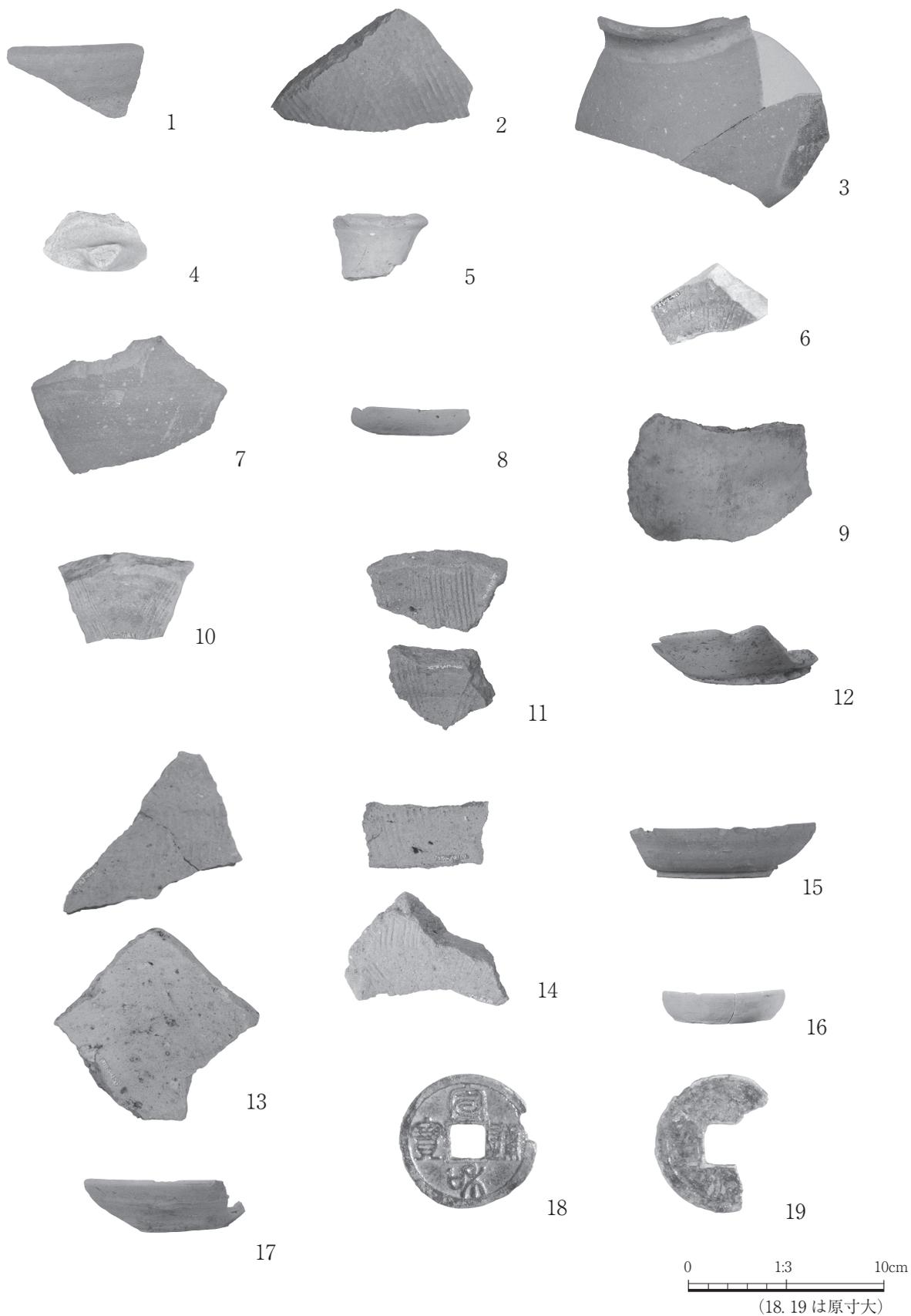


写真2 出土遺物

表3 遺物観察表

No.	出土遺構		種別	器種	残存		寸法 (cm)			成形・調整			色調・その他	時期
	遺構名	グリッド			部位	遺存	口径	底径	器高	外面	内面	底部		
1	-	表土一括	須恵質	片口鉢	口縁部	1/16	-	-	積上げ痕 ハケ調整	ハケ調整 口縁部から内側 に折返しあり	-	焼成良好 (外) 25Y 黄灰 6/1 (内) 25Y 灰白 7/1	中世	
2	-	ウ5 Ⅲ層	須恵器	甕	体部	1/16	-	-	タタキ目	あて具痕	-	焼成良好 (外) 10YR 灰黄褐 6/2 (内) 10YR 褐灰 6/1	古代	
3	-	ウ6 Ⅲ層	須恵器	短頸壺	口縁部～体部	6/16	11.4	-	ロクロ調整	ロクロ調整	-	(外) 75YR 灰黄褐 6/2 75YR 褐灰 5/4 (内) 75YR 褐灰 5/1 75YR 黒褐 3/1	古代	
4	-	カ6 Ⅲ層	土師質	内耳鍋	内耳と体部	1/16	-	-	粘土紐積上げ痕	内耳	-	外面残付着 (外) 5Y 黒 1.7/1 (内) 7.5Y 橙 7/6	中世	
5	-	ケ5 Ⅲ層	灰釉陶器	小瓶	口縁部	1/16	5.0	-	ロクロ調整	ロクロ調整 自然釉	-	(外) 25Y 灰白 7/1 (内) 25Y 灰白 7/1 25Y オリーブ灰 6/2 (釉薬) 内外ともに摩滅激しい	古代	
6	-	コ6 Ⅲ層	須恵質	播鉢	体部下半	1/16	-	-	粘土紐積上げ痕 斜位ヘラケズリ	鈷目	-	焼成良好、内外面架付着 (外) 5b 青灰 5/1 (内) 25YR 赤黒 1.7/1	中世	
7	-	コ6 Ⅲ層	須恵質	片口鉢	口縁部	2/16	-	-	粘土紐積上げ痕 横ハケ目	粘土紐積上げ痕 横ハケ目	-	焼成良好 (外・内) 7.5Y 灰 5/1	中世	
8	-	シ5 Ⅲ層	土師質	土師皿	口縁部～底部	5/16	7.5	1.4	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	粘土はやや粉質 (外・内) 7.5YR 橙 7/6	中世	
9	-	シ6 Ⅲ層	土師器	甕	胴部	2/16	-	-	ロクロ成形後 ハケ目	ロクロ成形後 横ハケ目	-	(外) 7.5YR にぶい、黄褐 5/3 10YR 黄褐 6/2 (内) 7.5YR にぶい、褐 5/4 7.5YR にぶい、橙 6/4	古代	
10	-	テ5 Ⅲ層	須恵質 (瓦質?)	播鉢	底部～体部下半	1/16	-	12.4	粘土紐積上げ痕 指圧痕 ハケ目	ハケ調整後鈷目	静止糸切り	(外) 7.5Y 灰 4/1 (内) N 灰 4/	中世	
11	-	ト4 Ⅲ層	須恵質	播鉢	体部	1/16	-	-	粘土紐積上げ痕 ハケ目	粘土紐積上げ痕 鈷目	-	(外・内) 10YR 褐灰 5/1	中世	
12	-	ナ4	土師器	杯	口縁部～底部	6/16	11	3.3	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	(外) 10YR にぶい、黄褐 7/4 10YR 灰褐 6/1 (内) 10YR にぶい、黄橙 7/4 10YR にぶい、黄橙 6/4 摩滅目立つ	古代	
13	SQ1	セ5・ソ5	須恵質	播鉢	底部～口縁部	3/16	-	9	粘土紐積上げ痕 ナデ調整	粘土紐積上げ痕 押圧痕粗い鈷目	静止糸切り	軟質焼成 (外・内) 5Y 灰白 7/1 在地産か	中世	
14	SQ1	セ5・ソ5	須恵質	播鉢	体部	2/16	-	-	粘土紐積上げ痕 斜位ヘラケズリ	やや粗い鈷目	-	(外) 5Y 灰 4/1 (内) 5Y 灰 5/1 在地産か	中世	
15	-	エ6	須恵器	杯	口縁部～底部	5/16	14.8	3.1	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り 貼付高台	(外・内) 7.5Y 灰 4/1	古代	
16	-	ケ3	土師質	土師皿	口縁部～底部	9/16	7.5	1.8	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	(外) 10YR にぶい、黄橙 7/2 (内) 10YR 浅黄橙 8/4	中世	
17	-	タ4	土師器	杯	口縁部～底部	6/16	11.8	2.9	ロクロナデ 底部から体部への 立上りヘラナデ	ロクロナデ	回転糸切り 後ヘラナデ	(外・内) 10YR にぶい、黄橙 7/3	古代	

6. まとめ

今回調査では、発掘調査面積が約500㎡であったが、遺構らしい遺構の検出はなかった。大多数の遺物は散布した状態で出土し、摩滅が目立つ。接合可能な遺物はかぞえるほどで、完形になるものはなかった。これらの遺物は、近現代の陶磁器が混じる中で出土し、埋蔵状態が良好ではなかったことが、調査対象地の南壁断面図や北壁断面図の土層堆積状況からも読み取れる。

包含層の残存状況が悪い状態ではあったが、遺物集中域 SQ1からは播鉢片が6点出土しており、周辺のグリッドからも実測可能な中世の遺物が出土している。遺物重量をみていくと土師器が3.125kg、須恵器が1.484kg、黒色土器0.454kgと古代の遺物の出土量が多い。柳原遺跡から北東に位置する八幡地域での発掘調査（P5図3の②）では、住居跡ではないが土坑が検出され、古代の遺物が報告されている。また、平成25年度の八幡浦A遺跡の調査（P5図3の④）では、上層から中世の遺物が出土し、下層から鎌倉時代の人骨が出土している。柳原遺跡出土品と、これら柳原遺跡周辺での発掘調査の結果を合わせて考慮すると、遺跡より東の墨坂地区において古代から中世の集落が形成されていた可能性を検討する際に有用な資料である、と評価できよう。

引用・参考文献

- 須坂市教育委員会2016『長野県須坂市遺跡地名表（付 遺跡詳細分布図）』
- 須坂市教育委員会2023『第27集 2012（平成24）年度 須坂市内発掘調査報告書』
- 長野県史刊行会1988「長野県史 考古資料編 全一卷（四）遺構・遺物」
- 須坂市誌編さん室2017『須坂市誌 第三巻 歴史編Ⅰ』
- 長野市教育委員会1991『栗田城跡 下宇木遺跡 三輪遺跡（3）』
- 中野市教育委員会1993『高梨氏居館跡』
- 佐久市教育委員会1986『大井城跡（黒岩城跡）』
- 木島平村教育委員会2023『木島平村内弥生時代遺跡（根塚遺跡・平塚遺跡・三枚原遺跡・宮の内遺跡）』
- (財)長野県埋蔵文化財センター1998『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書3—更埴市内—更埴条里遺跡 屋代遺跡群』
- (財)長野県埋蔵文化財センター1999『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書26—更埴市内その5—更埴条里遺跡・屋代遺跡群（含む大境遺跡・窪河原遺跡）—古代1編』
- (財)長野県埋蔵文化財センター2000『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書27—更埴市内その6—更埴条里遺跡・屋代遺跡群（含む大境遺跡・窪河原遺跡）—古代2・中世・近代編』
- (財)長野県埋蔵文化財センター2000『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書28—更埴市内その7—更埴条里遺跡・屋代遺跡群（含む大境遺跡・窪河原遺跡）—総論編—』
- 日本貨幣商協同組合2023『日本貨幣カタログ2023版』
- 中世土器研究会1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

第2節 大和合古墳

1. 調査に至る経緯

大和合古墳は坂田共生の森内、須坂市大字坂田字大和合697番地に位置する。平成9年に森林組合による林道開設時に墳丘の一部が破壊され、横穴式石室が露呈した。その後、平成15年に古墳であることを確認した。平成17年2月に石室を構成していた石の一部が直下の道路に崩落したため、散策道を通行する市民の安全確保及び古墳保護が必要となり、土留め（木柵）の設置が農林課の治山事業として平成19年12月に実施された。しかし、平成25年9月の台風18号の影響により既設の木柵がすべて崩れ落ち、古墳の石室が露出した状態となったため、断面崩落防止工事が必要となった。

そこで、2013（平成25）年10月18日付で事業主である須坂市産業振興部農林課より「土木工事のための埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。断面崩落工事はコンクリートによる土留めの構築で、大和合古墳の現状保存を目的とし、古墳の石室をほぼ直接掘削することなく行われることとなった。長野県教育委員会あてに立会調査が必要との意見を付して同年11月13日付で「土木工事のための埋蔵文化財発掘の意見書」を提出した。なお、石室が露呈している現状断面図作成を、施工前に立会調査として行うこととした。

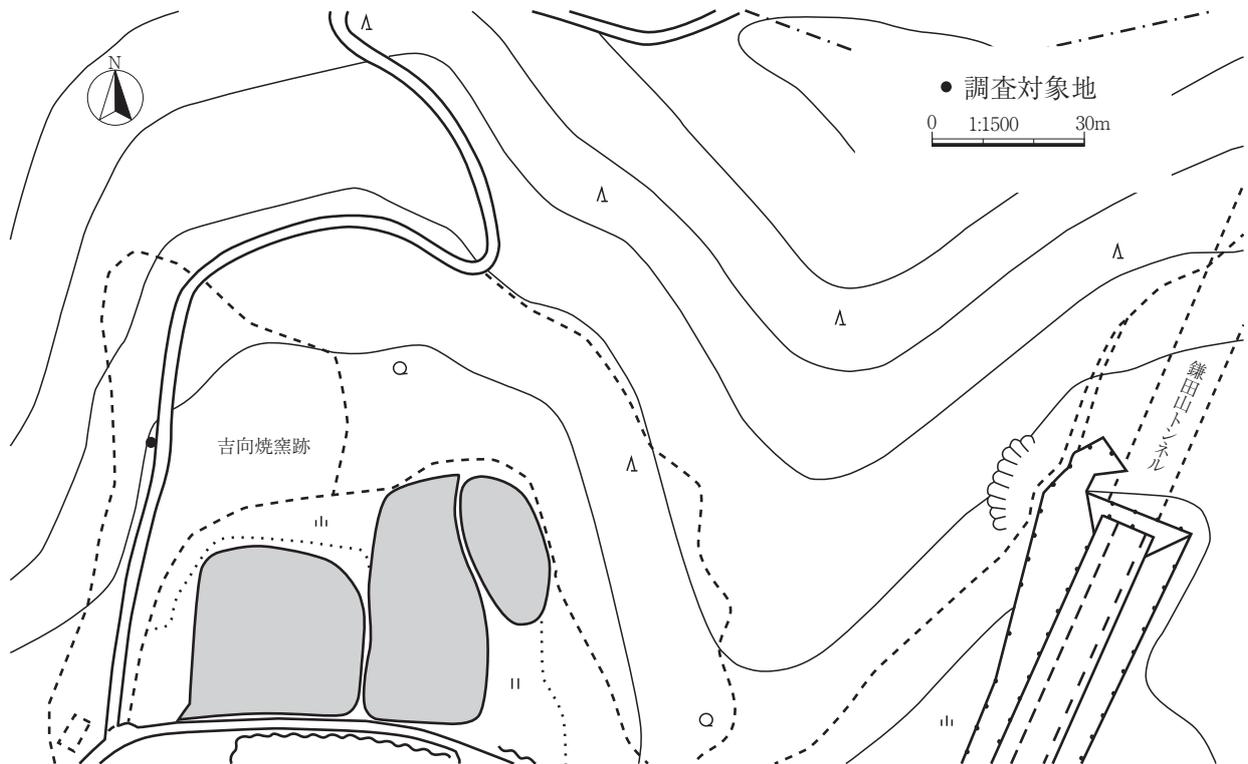


図6 調査地位置図

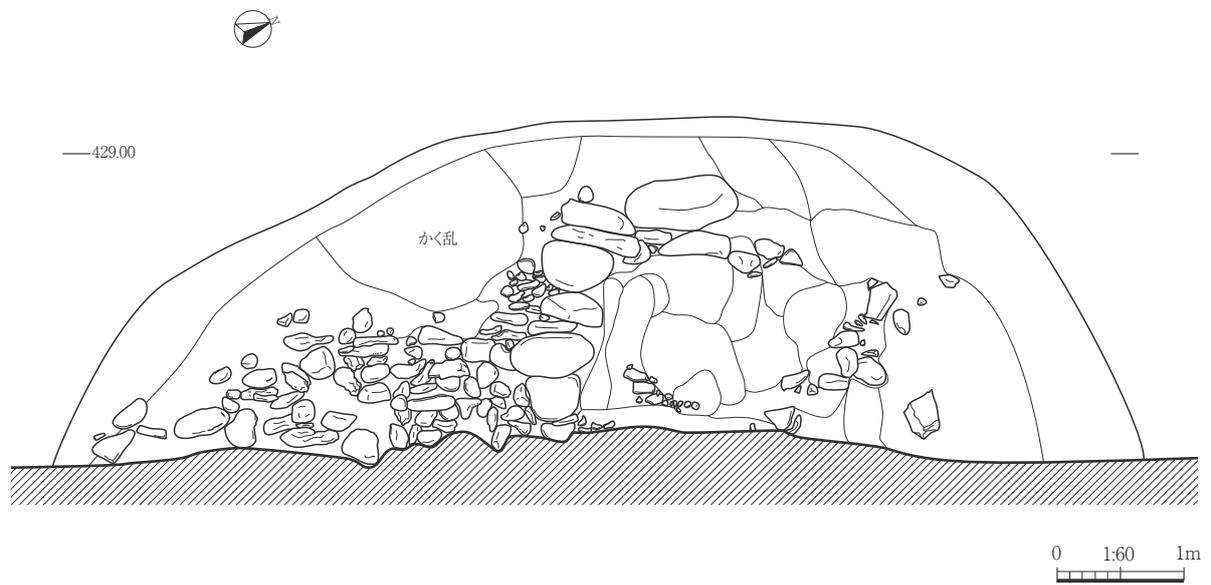


图7 断面图



写真3 大和合古墳断面

報告書抄録

ふりがな	にせんじゅうさん（へいせいにじゅうご）ねんど すざかしないはつくつちょうさほうこくしょ そのいち
書名	2013（平成25）年度 須坂市内発掘調査報告書 —その1—
副書名	塩川・須坂・小山遺跡群内 柳原遺跡 大和合古墳
シリーズ名	須坂市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第28集
編著者名	松井千穂
編集機関	須坂市社会共創部文化スポーツ課
所在地	〒382-8511 長野県須坂市大字須坂1528番地の1
発行年月日	2024（令和6）年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しおかわ すざか 塩川・須坂・ こやまいせきぐん 小山遺跡群 やなぎはらいせき 柳原遺跡	長野県須坂市 大字塩川字柳 原 733 番地 2 ほか	202070	19	36度 39分 05秒	138度 17分 47秒	2013. 11. 22 ～2013. 12. 20	500.3	市道臥竜線 延長工事
主な遺構・ 要約	遺構：遺物集中域 1箇所 炭化物集中域 1箇所 種別：散布地 主な時代：古代～中世 主な遺物：土師器・須恵器・播鉢ほか 遺物は古代から中世のものを中心に、近世・近代の陶磁器が混じる。摩滅の激しい土器が多いため、原位置を保っていたとは考えにくい。遺物は百々川の氾濫による転移を繰り返し須坂扇状地の東から西へ、柳原地籍に漂着したものであると考えられる。これらの遺物は、調査地点から東の地域に古くから人々が定住していたことを示すものである。							

ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
だいわ こうこふん 大和合古墳	長野県須坂市 大字坂田字大 和合 697 番地	202070	112	36度 39分 02秒	138度 19分 15秒	2014. 02. 14 ～2014. 02. 21	17.655	石室崩壊 防止工事

須坂市埋蔵文化財発掘調査報告書 第28集

2013（平成25）年度 須坂市内発掘調査報告書

—その1—

塩川・須坂・小山遺跡群内 柳原遺跡 大和合古墳

発行日 2024（令和6）年3月31日

編集 須坂市社会共創部文化スポーツ課

発行 須坂市教育委員会

印刷 信毎書籍印刷株式会社

